



プログラムスケジュール

2005年12月10日(日)

あいさつ 福田 アジオ(神奈川大学教授)  
 司会進行 鈴木 陽一(神奈川大学教授)  
 研究発表  
 戴立強(中国・遼寧省博物館研究員)  
 「『清明上河図』と『姑蘇繁華図』」  
 馬漢民(中国・中国俗文学学会常務理事)  
 「蘇州の生活と民俗」  
 張長植(韓国・国立民俗博物館民俗研究科学芸研究官)  
 「朝鮮時代の仏画(甘露幀)にみる伝統娯楽の諸相」  
 金貞我(神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員)  
 「都市図における風俗表現の機能」  
 討論

主催：神奈川大学21世紀COEプログラム  
 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班

開催の主旨

鈴木 陽一

一班の出発点は、日本常民文化研究所の資産である、中世の絵巻物から造られた『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下『絵引』)にある。この貴重な文化遺産の存在を世界に知らしめ、データとして利用可能にすること、そのために『絵引』のキャプションを複数の言語で翻訳することが重要な課題となっている。

更に一班では『絵引』を出発点として、これを時間と空間の双方向に拡大することを計画した。すなわち、絵引きの対象を日本の中世から近世へと広げること、同時に日本を離れて東アジア地域に対象を広げること大きな目的として掲げた。その中で我々のグループは、空間の拡大、つまり東アジアにおける図像資料から、日常生活に関わる新たな『常民生活絵引 東アジア版』を作成すべく、研究、調査、更に此に基づく作業を開始した。しかし、我々はまずその第一歩、すなわちどの図像を絵引きの対象とするのかということから困難に直面することになった。

朝鮮半島の図像資料については、美術史の専門家である金貞我氏の努力により、比較的早い段階で朝鮮時代に制作された風俗画がその対象となりうる事が明らかとなり、調査、研究を始めることとなった。しかし、東アジ

アの中でも中国文化については、事はそう容易ではなかった。古典を規範とする意識があまりにも強烈な中国文化においては、生活それも庶民の生活をリアルに描くことそれ自体がほとんどあり得ないことであった。文字であろうと、図像であろうと、実態がどうであるかということよりも、「～であらねばならない」を優先させる人々にとっては、描かれるものは常に頭の中のイメージであればよかったのである。そのため、中国においては何を絵引きの対象とすべきかが、一班全体にとっても極めて厄介な問題であった。

その後、いくつかの庶民生活と関わる図像資料を比較検討した結果、我々が選択したのは18世紀、乾隆年間に徐揚によって描かれた「姑蘇繁華図」(以下「繁華図」、通称「盛世滋生図」という一巻の画卷であった。「繁華図」は蘇州の郊外、太湖付近の木流鎮から蘇州の城門に至る風景と、その繁盛ぶりを描いたもので、近年その資料的価値が注目され、中国は無論、日本でも本格的な研究の対象となり始めていたものである。そこで、我々はまず原本の影印本やネットで公開された電子映像の中から比較的良質のものを選び出し、これを拡大した上で、数十の場面に分割し、一つ一つの画面から人物、服装、動作、道具、商品、食品、招牌など多くのモノとコトとを分節し、解読を試みていった。

しかし、その過程で更に我々はいくつかの問題にぶつかった。箇条書きに列挙する

影印本の印刷が不鮮明で、事物や動作については十分に読み取れないものが少なくない。

動作、事物が映像としてはっきりと見えていても、一体それが何を意味するのかが分からない。例えば天秤棒で荷を担う姿が数多く描かれるが、一体何を担っているのか、棒手ふりなのかただの運搬人なのか、その図像の意味するところを解読できない。

蘇州の実際の風景、或いは当時の人々の暮らしぶりがおよそどのようなものであり、それがどの程度リアルに反映しているのかが把握できない。

こうした問題を解決するために、我々はいくつかの対策を講じた。まずよりよい図像、すなわち「繁華図」の原本にできるだけ近いものを入手することが必要となっ

た。そこで、原本を所蔵する遼寧博物館を二度訪問し、同博物館の研究員である戴立強氏の援助により、原本を見ることができた上に、極めて原本に近い図像を我々の研究に於いて二次利用することが可能になった。

また、図像と現実の風景や、当時の民俗との関係を明らかにするために、蘇州に二度の調査を行うとともに、蘇州民俗の研究者によるレクチュアを受けることにした。その結果、図像が他の中国の図像に比して、蘇州郊外の現実の風景、そして蘇州の民俗が相当程度リアルに写されていることが明らかになった。我々が「繁華図」を絵引きの対象としたのは少なくとも誤った選択ではなかったのである。

このように我々の研究の基礎が次第に固まってきた状況を踏まえ、更に大きく前進させるために、上記の諸問題、すなわち「繁華図」を絵引きの対象とするために解決すべき様々な問題について、専門家を招聘して研究会を開くこととした。同時に、平行して研究を進めている朝鮮半島の、絵引きの対象となる風俗図についても、解読のためのリファランスとなりうる新たな資料について報告を受け、合わせて東アジア全般の図像資料について考察を深めることとした。

研究会は2005年12月10日、神奈川大学において公開で開催された。当日は師走の土曜日であり、他の研究機関でも多くのシンポジウムなどが開催されていたが、こちらの予想を超える市民が参加し、大いに盛り上がった。

報告者と報告のタイトルは以下の通りである。

戴立強「『清明上河図』と『姑蘇繁華図』」(中国語)

馬漢民「蘇州の生活と民俗」(中国語)

張長植「朝鮮時代の仏画(甘露幀)にみる伝統娯楽の諸相」(韓国語)

金貞我「都市図における風俗表現の機能」

個々の発表の内容についてはそれぞれの先生方御自身による文章を御参照いただくとして、全体の流れについて、司会を勤めたものとして一言申し添えておきたい。

今回の研究会では、「繁華図」の中国美術史、特に風俗を描いた絵巻物の歴史の中での位置づけから始まり、「繁華図」の背景となった蘇州とその民俗についての簡略ながら深みのある分析につながり、仏画という異なる図像資料によって東アジアの図像資料の広がりや興行が示され、最後に東アジア全般の都市を描いた図像の位置づけと枠組みについての俯瞰的な見通しが提示され、決して自画自賛ではなくまことに「起承転結」という言葉そのままに鮮やかにまとまりを見せて収束することができたと思う。戴、馬、張の各先生はわずか数日の滞在でもあり、必ずしも十分な打ち合わせ時間が確保できず、また当日も通訳付きであったために、実際の発表時間は極めて短いものとせざるを得なかった。にもかかわらず、見事にまとまりをみせたのは、各先生が我々の研究の目的を十分に理解し全面的に協力してくださったことによるところが大きい。ここに記し、深甚なる謝意を表す。



研究会全景

戴立強氏(写真左)による報告



張長植氏(写真左)による報告



鈴木陽一教授による司会進行



金貞我氏による報告



馬漢民氏(写真左)による報告